

らびふプラス

夫婦の円満家計術

上

結婚したら家計をどう管理するか。共働きなら2人の収入をどうするか、それぞれが管理するから資産形成の行方は変わる。結婚前に持っていたお金は誰のものかも知っておいた方がよい。円満な結婚生活に不可欠な家計管理。まずは生活費と貯蓄を考えよう。

「あなた、本当に50万円しか預金がないの？」。東京都に住む会社員、Aさん(42)はあせんとした。結婚して10年近く共働きをしている。そろそろ家を買おうと考え、私は頭金を1000万円くらい払えるわ。あなたはいくら出せる？」と尋ねた時のことだ。

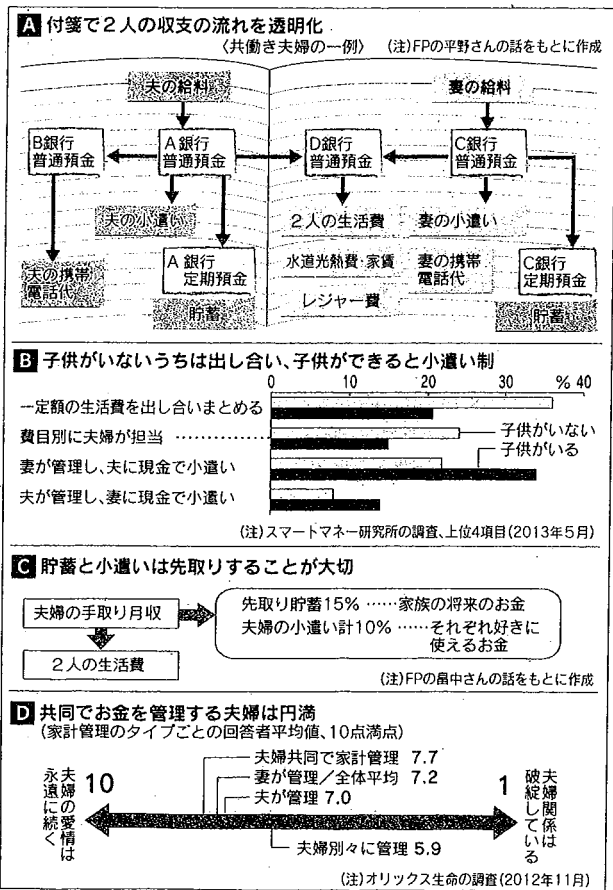
団体職員の夫は年収が1000万円ある。それにもかかわらず、夫は驚いた表情で「僕は50万円しかないよ」と答えたのだ。

収入は夫婦それぞれで管理。必要に応じて生活費を出し合って、残りは自由に使っていた。互いの年収は知っているが、使い道やどのくらい貯蓄をしているかを話し合ったことは一度もない。Aさんはもっと早くから2人で家計管理を考えるべきだったと後悔しきりだ。

「住宅購入や子供の進学で多額の資金が必要になって初めて、互いのふところ事情を知り、仰天する夫婦は多い」。ファイナンシャルプランナー(FP)の畠中雅子さんはそう指摘する。

今は共働き夫婦が多数派。「結婚したら互いの収入から毎月一定額ずつ生活費を出し合おう」と考える人が多い。ここに問題の種が潜んでいる(畠中さん)。それぞれが残りの金額をどう使ったかが不透明になりやすく、夫婦の貯蓄がいくらかも正確に把握で

ためるなら財布は1つ



人生設計、早めに意思統一

家を買つか、子供を持つか、海外旅行の頻度はどうするか。こうした希望や計画をかなえるには、まとまった資金が必要。2人で一緒に貯蓄する必要があると実感できれば、財布を一つにするきっかけになる。平野さんは始める。始めてから最初の1、2ヵ月は助走期間。2人の生活にいくらかかるかを察する。それぞれが一定額の生活費を出し合う形がまわらない。大切なのは家計支の流れを透明化する。収入と支出と貯蓄残高を互いに確認することには欠かせない。

平野さんは効果的な方法として「貯蓄の活用を勧める。互いが持つ口座を紙に書き、収入がどの口座に振り込まれるか、世帯の家賃や水道光熱費・生活費、夫婦のレジャー費など支出どの口座か

「5年後に家を買ったため、頭金を500万円ためるなど、お金の必要な時期と額を一覧表にするとよいだろう。」

夫婦一体の家計管理は、子供ができたときに迫られることが多い。25、34歳のお金の使い方を分析する「スマートマネー」研究所(東京都港区)が、働く既婚男女に実施した調査によると、子供がいない夫婦では収入をそれぞれで管理するものが主流だが、子供がいる夫婦

では妻が家計管理し、夫に小遣いを渡すスタイルが最も多くなった(グラフB)。

畠中さんも「子供にかかる費用をきつかけに、小遣い制にする夫婦が多い」と指摘。互いの手取り収入から世帯の貯蓄を15%、2人の小遣いを計10%取り分け、残りを生活費としてまとめる方法を勧める(図C)。

小遣い制で家計簿を妻が付けても情報は共有するのが1つの財布を円満に管理するポイント。家計支出や貯蓄残高は2人で確かめ、教育費など使い道は2人で話し合ってから決めることも基本だろう。

家計管理は円満な夫婦関係のパロメーターでもある。オリックス生命が2012年に実施した調査によると、最も関係が円満だと感じているのは家計を共同で管理する夫婦。別々に管理する夫婦では破綻の懸念を感じる人が比較的多かった(図D)。心に留めておきたい。(大賀智子)

おさいふナビ